

2024 年 4 月号

# 『定年が楽しみになる！ オヤジの地域デビュー』

清水孝幸/著・佐藤正明/絵  
東京新聞  
2018.3 発行  
(367/シ)



定年退職後、長い自由な時間を毎日どこで何をして過ごしたらいいのかー。

漠然とした不安を抱えながら、元・新聞記者の著者は、かたっぱしから地域行事、サークル、ボランティアなどに参加します。果たして、会社に代わる「居場所」を見つけられるのかー？（家庭以外で！）

新しい環境、新しい出会い。春はたくさんの気持ちが交錯して、そわそわします。〇〇デビューをするには、ぴったりの季節。失敗など気にせず一歩踏み出せば、仕事とは違った世界が待っているかもしれません。新しい自分を演じてみるのもアリ、ですね。(M)

2024 年 5 月号

# 『Q』

呉勝浩/著  
小学館  
2023.11 発行  
(F/ゴカツ)



すべての者を魅了する天才・キュウ。彼は眉目秀麗でダンスの天賦の才を持ち、ほんの些細な動作や佇まいでさえ、ほかとは少し違うと思わせてしまう少年だ。キュウの才能と、彼の可能性に情熱や莫大な資金を、そして自分の人生さえ捧げていく人たちの力で、パフォーマー「Q」は世界中を虜にしている。

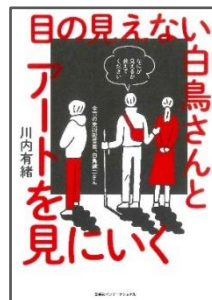
彼をより輝かせるために奔走する血のつながらない2人の姉、ロクと執行猶予中のハチ、そしてそれを邪魔しようとする者。キュウと姉たちが選択した道はどこへ向かうのか。

「才能」を持つ者、活かす者、それを嫉妬する、憧れる、応援する、感化される者…。才能ある者が与える影響は、陰も陽もあるのだろう。(Y)

2024 年 6 月号

# 『目の見えない白鳥さんと アートを見に行く』

川内有緒/著  
集英社インターナショナル  
2021.9 発行  
(706/カ)

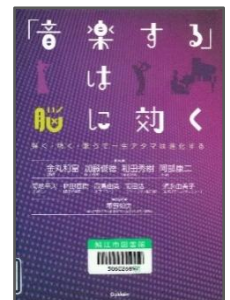


本書は「全盲の美術鑑賞者」白鳥さんと、その友人が美術館巡りをするルポルタージュです。白鳥さんは「見えるひと」に作品の印象などを言葉で伝えてもらうという、独自の鑑賞法でアートを楽しみます。同行者もまた作品を言葉にすることで、実はちゃんと見ていなかったことに気づいていきます。彼らが作品を見ながら、食事をしながら語るのにはアートだけにとどまらず、白鳥さん自身のことや障がいや世の中のこと。私はアート音痴が長年の悩みでしたが、白鳥さんたちの鑑賞した作品や楽しい会話を追体験するうちに、アートの楽しみ方を教えてもらったような気がしました。(T)

2024 年 7 月号

# 『「音楽する」は脳に効く』

重野知央/編著  
Gakken  
2022.11 発行  
(761/オ)

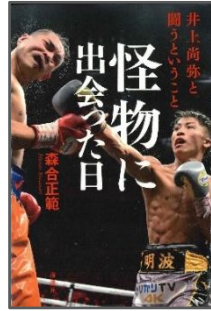


子どもの発達や大人の老化防止、認知症予防など脳に関すること、楽器演奏や音楽を聴く、歌うなど「音楽する」ことが効く…？脳内科や精神科など脳に関わる様々な分野の医師が、「音楽する」が科学的な面からどのように脳に効果があるのかを示しています。

聴いても歌っても効くのなら、車の中で聴いているラジオやCD、ひとりでの熱唱も、脳の役に立っているかもしれませんね。(S)

2024 年 8 月号

『怪物に出会った日  
-井上尚弥と闘うということ-』  
森合正範/著  
講談社  
2023.10 発行  
(788/イ)



この本の入荷を知ったとき、私が読むことはまずないなと思いました。そのくらいボクシングとは無縁でした。

それから数ヶ月後の 2024 年 5 月 6 日、私は食い入るようにテレビを見ていました。東京ドームで行われた、井上尚弥選手とルイス・ネリ選手のタイトルマッチです。1 ラウンドで井上選手がダウンを食らうという大波乱。選手の集中力、駆け引き、会場の熱気、すべてに引き込まれました。そして本作をすぐ手に取りました。井上選手と対戦した選手の視点から、井上選手の才能や狂気が描かれています。

好きなジャンルを確立するのもいいけれど、普段は選ばない本を手にとってみると思わぬ出会いがあるかもしれませんね。(h)

2024 年 9 月号

『ふくい巨木』  
小林 則夫/[ほか]編集  
福井県自然保護センター  
1992.3 発行  
(S653/フ)



巨木を前にすると、日常の些末なことが浄化されていくような気がします。この本では、種類も場所も千差万別な福井県の巨木に出会えます。調査の対象は、地上から 1.3m の所の幹の周囲の大きさが 3.0m 以上の樹木とし、当時 1,373 本を記録しました。出版年は 1992 年と 32 年前ですが、巨木からすると微々たる年月かもしれません。今秋、9 月 28 日(土)に「第 35 回巨木を語ろう全国フォーラム」が大野市で県内初開催されます。巨木に会うために無暗に立ち入ってはいけませんが、自分が住む地域の巨木を知り、見守っていくよい機会にしていきたいと思っています。(T)

2024 年 10 月号

『鴨川ランナー』  
グレゴリー・ケズナジャット/著  
講談社  
2021.10 発行  
(F/ケズナ)



主人公の米国人青年は、日本で暮らしているにもかかわらず、なぜか日本語を封じられている。求められるのは、異国らしさ。向学心の強いガールフレンドとの会話は全て英語。たまに日本語で話しかけても英語で返ってくる。時には結婚式場のチャペルで、牧師として日本語で誓いの言葉を話す、拙い発音の方が好感度が高いと言われ、カタコト日本語で非日常を演出する。

これらの状況とそれに伴うモヤモヤを全編日本語で綴る著者は、日本語を母語としない米国人。驚きの日本語力が遺憾なく発揮されている。きっと執筆中は、楽しくて仕方なかっただろう。(K)

2024 年 11 月号

『奇書の世界史』  
三崎 律日/著  
KADOKAWA  
2019.8 発行  
(020/ミ)

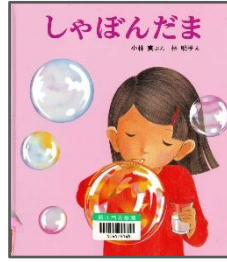


人類が文字を得て以来、様々な本が書かれてきました。そのたくさんの本の中でも「奇書」とされる本があります。その多くが、作者が「奇書」たるべしと書かれた本であるのに対し、この本で紹介されているものは「数奇な運命を辿った書物」です。ある時代では偉大な名著と称えられていたものが、とんでもない偽書だったり、逆に異端とされていたことが、科学の進歩によって真実とされたり。本は「価値観の変化」で評価が変わっていきませんが、なぜ書かれて、何が書かれているのか全く解明されていない本もあります。今ベストセラーとされている本も、百年後には「奇書」と呼ばれているかもしれませんね。(K)

2024 年 12 月号

# 『しゃぼんだま』

小林 実/ぶん  
林 明子/え  
福音館書店  
2023. 12 発行  
(E/ハヤシ)



1975 年に雑誌「かがくのとも」として発行された本書、長らく絶版になっていましたが、昨年、林明子さんの絵本作家デビュー50 周年を記念して、復刊されました。林さんがお話の絵を描くときは、姪御さんや甥御さんをモデルに描いているそうです。そのためか、子どものちょっとしたしぐさが自然で、人のぬくもりも感じます。しゃぼん玉はふわふわと浮かんで、ページから飛び出していきそうです。表面の色も渦巻いて動いているように見えます。絵本には、子どもだけでなく大人も楽しめる作品がたくさんあります。丁寧に描かれた美しい絵本をじっくりながめて、心落ち着く時間を持つのもいいですね。(K)

2025 年 1 月号

# 『台所用具を一生ものにする 手入れ術』

日野 明子/著  
誠文堂新光社  
2014. 6 発行  
(596/ヒ)

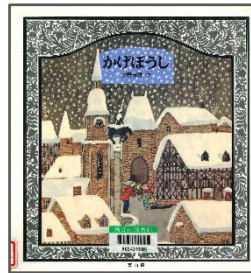


私には大事に使い続けている道具がいくつかあります。中でも思い入れのあるのが、20 年以上使い続けてきた包丁です。切れ味が悪くなれば砥石で研いで大事に使ってきましたが、20 年も使い続けると鋼に限界がきてしまい、研いでも切れなくなっていました。新しく迎え入れた包丁も1～2 週間に一度は研いで使っています。私にとってその包丁は美味しい料理を作ることができる、縁起物のような存在なのです。キッチンの便利グッズが流行っている昨今ですが、こだわった料理道具を長く使い込むと使い始めた以上に愛着がわき、使うのが楽しくなると思います。(Y)

2025 年 2 月号

# 『かげぼうし』

安野 光雅/作  
富山房  
2002. 12 発行  
(E/アンノ)



昨年のこと、近くの美術館で安野光雅さんの作品展があったので、観に行きました。細かく描きこまれた作品には、時間を忘れて観てしまうものもありました。中でも私が心惹かれたのは、『かげぼうし』という絵本の原画です。アンデルセンの『マッチ売りの少女』を題材にした世界を左ページに、影たちが集まる「影の国」を右ページに、ふたつの世界の話が交互に進む絵本です。絵の具で描かれた左ページに対し、「影の国」は、ほぼ黒一色の紙の切り絵で表現されており、驚きました。生き生きとした「影の国」に目を奪われ、こんな絵を切り出せたら楽しいだろうなあ、と思いました。(m)

2025 年 3 月号

# 『レディ・ムラサキの ティーパーティ』

らせん訳「源氏物語」  
穂矢まりえ・森山恵/著  
講談社  
2024. 2 発行  
(913. 3/ム)



著者である姉妹は、ある時『The Tale of Genji』一百年前、アーサー・ウェイリーが英訳した『源氏物語』一巻を、現代日本語に訳し戻そうと思い立つ。

本書は、姉妹が『源氏物語 A. ウェイリー版』を“らせん訳”する過程での気づきや喜びを綴ったエッセイ。東洋の言語や古典文学に精通した英国人ウェイリーは、千年もの時、場所、空間を隔てる『源氏物語』の物語世界や、その特徴である「あはれ」を英語圏の読者に伝えるように、どう訳していったのか。「末摘花」や「須磨」の背景に何を見ていたのか。読み進めるうちに、姉妹の熱量に心地よく圧倒される。

『源氏物語』は、異文化をも巻き込みながら“らせん”を描き、世界文学となっていたのだ。(K)